

「グアテマラと日本をつなぐ」

「友人たちのささやき」 太田裕之

初めてグアテマラを訪れたのは 92 年 3 月。大学 2 回生から 3 回生にかけ、春休みの海外旅行だった。観光地をめぐるだけだったが、アンティグアの公園でカクチケルの若者コルネリオと知り合い、ボルカン・デ・アグアの登り口にある彼の自宅を訪ねた。僕より 2 歳下の当時 18 歳。たいした会話ができただけではないが、遠く離れた「別世界」に友人ができたことが嬉しかった。

2 カ月余りの旅行を終えて日本に戻り、コルネリオに手紙を書いたが、返事はない。日常の関心事からグアテマラは外れたが、その年の秋、リゴベルタ・メンチュウさんのノーベル平和賞受賞を伝える雑誌記事をたまたま読んだ。内戦下に先住民が置かれた過酷な状況を知り、コルネリオの顔が浮かぶと、遠い国のニュースとは思えなくなった。「彼はそんな中で生まれ育ち、今も暮らしているのか」と。

93 年の秋から翌年春にかけ、再びグアテマラを訪れた。「コナビグア(連れ合いを奪われた女性たちの会)」や、軍の弾圧でメキシコとの国境地帯(イシュカン)のジャングルに逃れて非暴力・不服従の生活を送る人々の「抵抗の共同体」、メキシコからの帰還難民の共同体など、いろんな人に会って話を聞き、写真を撮った(青西靖夫さんや石川智子さんと出会ったのもこの時だ)。95 年の秋にも 3 カ月滞在し、「デフェンソリア・マヤ(マヤの権利を守る会)」のファン・レオンさんの選挙活動に同行した。

不当な弾圧に対し団結して立ち向かう力強さや、わずかなものでも分かち合う優しさを体感させてもらった。そして何より、喜怒哀楽を共有する友人が増えた。もちろん、コルネリオとの付き合いも深まった。

6 年間の学生生活のうち最後の 2 年間は、この 2 回の滞在で見聞き記録したことを、写真展やスライド報告会で伝える活動に充てた。96 年 4 月から新聞記者として働き始めたのも、その延長だ。僕にとって、取材して伝えるという現在の生業の原点はグアテマラにあると言える。

担当する仕事に追われる毎日で、そのグアテマラを訪れる機会は減った。97 年 11 月に新婚旅行で、02 年 11 月に取材で、それぞれ 1 週間あまり滞在しただけだ。それでも、グアテマラから誰かがスピーキングツアーで来日する際などには参加し、記事を書いている。あまりにささやかで、頻度も少ないが、日本の新聞社内にいる自分の役割は記事を書くことだと考える。

その際、いつも網膜の裏あたりに浮かぶのは、コルネリオをはじめグアテマラの友人たちの姿だ。表情や息遣いまで感じられ、「別世界ではないよ」とささやいている気がする。